

悪の自覚としての文学

——ジュリアン・グリーン『モイラ』に関する一考察——

坂 口 哲 啓

序

アメリカ人を両親にもちながらパリに住み、作品のほとんどをフランス語で書いたジュリアン・グリーン (Julien Green 1900-1998) は、通常、モーリヤック (François Mauriac 1885-1970) やベルナノス (Georges Bernanos 1888-1948) と並び、二十世紀を代表するフランスのカトリック作家として理解されている。主な作品としては、十九の中・長編小説のほか、短編小説、戯曲、自伝、エッセー、評論、さらには膨大な日記がある。本稿で取り上げる小説『モイラ』(Maira 1950) は、初期の習作的作品を別にすれば、十一番目の小説作品であり、ほぼ二十世紀全体を生きた作家にとって、まさに中期を代表する作品である。⁽¹⁾

ホーソン、ブロンテ姉妹、ポーといった英米系の文学と仏文学の伝統を深く吸収しながら自己の文学世界を確立

悪の自覚としての文学

したグリーンの小説作品は、終始一貫、心の奥深くに巣食う強烈な欲望によって、常軌を逸した行動へ駆り立てられてしまう人間の悲劇的な姿を冷徹な眼差しでリアルに描きながら、そのリアルな現実世界がいつしか深い幻想性を帯びてくるという独特な文学世界を生み出している。作中人物たちが住む家が、彼らが暮らす平凡な街が、物語の進展とともに夢魔の様相を呈してくるのである。それは、作者が、単なる眼に見える現実とは異なる現実を見据えていることを意味しているだろう。その現実とは、グリーン自身が日記のなかで語っている「幻視の現実」(réalité de vision)である。「小説家にとって、ある常套的な現実と、幻視の現実とでも呼ぶことのできる現実とがある。(…)たとえば、こう書くだけでは十分ではないのだ——《彼女はそのまなざしの前でたじろいだ》内側から、これらの言葉が描いているものを見なければならぬ。そうしなければ、次に来る文章は少し現実ではなくなるだろう(換言すれば、内なる真実のひびきをもたないだろう。内なる真実こそ唯一の真実なのだ)」(傍点坂口)。人間の現実を見据えるグリーンの眼差しは、常に、その奥にある不可視の世界にまで届こうとする。プレイヤード版の編者ジャック・プティはそれを「内的ヴィジョン」⁽³⁾と呼んでいるが、これこそが作者にとって真実を捉える唯一の手段なのである。眼に見え耳に聞こえる行動や言葉をリアルに記述・描写しながら、その背後にあって言葉や行動を支配している奥深い心の動き、すなわち「内なる真実」を捉えようとするためまめ努力こそが、ジュリアン・グリーンという作家の長い長い文学活動であったと言えるだろう。

さて、こうした「内なる真実」を捉え表現しようとするグリーンにとって、その真実とはいったいどんなものなのだろうか？ それは一言でいえば、人間の心の奥底に渦巻き、その人間を激しく衝き動かしてくる欲望である。もっと具体的に言えば、美しい女(あるいは男)に強烈に惹きつけられ、それによって自己の人生が破綻してしまうほど

の熾烈な欲望である。本稿で分析する小説『モイラ』の主人公ジョゼフ・デイについて言えば、彼は、モイラと呼ばれる娘と出会い強烈に魅了されるが、彼の内部から爆発的に噴出する欲望のエネルギーによって、最後には彼女を殺してしまう。だが、主人公は、単に自らの欲望に振り回されるだけではない。彼は、そうした、言わば、いかんともしがたい欲望に衝き動かされる自己の内面を絶えず見つめ、自らの内に巢食うその怪物的エネルギーを自覚し、そういう自己に苦しみ存在としても描かれている。こうした、どんなに抑えようとしても抑えきれない欲望に衝き動かされてしまう人間の心のあり方を本稿では「悪」と規定する。これは人間を「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている」⁽⁴⁾と語るパウロの見方であり、「罪悪深重煩惱熾盛ノ衆生」⁽⁵⁾と捉える親鸞の考え方に基づいている。したがって本稿では、まず、『モイラ』に登場する主人公の「悪」の諸相とそれを自覚するときの彼の心の軌跡を追い、次いでそれが親鸞とパウロの人間観とどう関わるかを検討し、最後に「悪」と「救済」の関係に言及できればと思う。

一、身体に対する嫌悪

『モイラ』は、アメリカのある大学町を舞台にして物語が展開するが、そこには、作者グリーン自身が一九一九年から三年間学んだヴァージニア大学でのさまざまな記憶が色濃く反映している。⁽⁶⁾多かれ少なかれ作者自身の内面が投影された主人公ジョゼフ・デイは、田舎町から出てきた十八歳の学生で、赤毛で背が高く痩せぎすで美しい青年⁽⁷⁾として描かれている。小説はこの青年が、ミセス・デアの経営する下宿を訪ねて来るところから始まる。その下宿人になることが決まったジョゼフは、そこから大学に通うことになる。このミセス・デアに養い子として育てられている

のがモイラであり、素行の悪さからどこか別の町の学校に行かされている。彼女は黒人と白人の混血児であり、ミセス・デアは彼女を「悪い性質をのこらず持っている下品⁽⁸⁾」な娘と言い、ジョゼフの学生仲間の一人は、服の着方が「挑発的」であり「ぞつとさせるような」化粧をし、「彼女のまわりには、ある種の家の中でしか匂わないような曖昧な匂いが立ち罩⁽⁹⁾めている」と語る。要するに娼婦的な要素を強くもった娘なのだ。この娘が使っていた部屋にジョゼフが入ることになり、そのことが後に二人の運命的な出会いを引き起こす⁽¹⁰⁾。

ところで、赤毛の美青年ジョゼフとはどんな人物なのだろうか？ 将来、聖職者になることを希望している彼は、毎日欠かさず聖書を読み、そこに生きる糧と慰めを見出す信仰心の厚い真面目な青年である。大学のなかで唯一心を許せる友人デーヴィドに彼は語る。「僕はキリストのそばに身を置きたいんだ、分かる？ 生きている人のそばに身を置くようにね。そして僕はキリストを見たいんだ⁽¹¹⁾」。キリストを知的に理解しようとしているデーヴィドには、このジョゼフのあまりにナイーブな物言いは理解できない。ジョゼフの信仰は荒々しく激しいもので、そんな彼には、周囲のほとんどの学生たちが道徳的に墮落しているように見えてしまう。そして彼はそうした周囲の学生たちを「救ってやりたい⁽¹²⁾」と考えるのだ。こうした彼の思考のなかには、素朴な信仰者に特有の鼻持ちならない傲慢さがあるのは確かである。実際、自分の魂さえ救えないのに、「人々の魂を救うこと⁽¹³⁾」を真剣に思い悩む主人公の姿に、周囲の仲間たちは鼻白み、滑稽を感じ、彼はますます周囲から孤立した存在になってゆく。

こうした主人公の毎日の生活は徹底的に禁欲的であり、それはまるで修道僧のような生活である。酒を飲むことも煙草を吸うことも、町の盛り場に行って遊ぶことも一切ない。それどころか、下宿においてさえも、彼は、たとえば、楽器を弾いたり歌を歌ったり、仲間と歓談するといった気晴らしを頑なに拒否するのだ。自分の部屋で彼がすること

といえば、大学の授業の予習復習と聖書を読み祈ることだけである。ときに、部屋の窓から見える庭の木々に季節の移ろいを見て感動することはあっても、世俗の何かに心動かしたり夢中になったりといったことが、彼には皆無なのだ。

ところで、ジヨゼフの禁欲的な性格がもつとも強く現われるのが、自己の身体も含めた人間の身体に対してである。まず、彼は、夜寝るとき、自分の身体を見ようとしない。「子供の頃から、暗闇で着物を脱ぐ習慣だったし、自分の身体に眼をやらないように用心していた」⁽¹⁴⁾。また、入浴するときも自分の身体をあえて見ないようにするのだ。「そこに眼を向けないようにしながら、自分の白い大きな身体にひっそりとシャボンをつけた」⁽¹⁵⁾。

身体を見ることの禁欲は、生身の身体のみならず、彫像にまで及ぶ。大学の構内には古代ギリシアの神々の像が並んでいるのだが、ジヨゼフはそれらを正視できない。友人サイモンとのやりとり。

「……あれは古代ギリシアの神々で、ヘルメスは子供のディオニュソスを腕に抱いているんだよ。——僕は偶像は嫌いなんだ、とジヨゼフは英語の教室の方へ歩きながら言った。——だってあれは僕たちにとっちゃ偶像じゃないんだよ、とサイモンはまるで叫ぶように説明してみた。——あれは単に、美しい人間を表しているだけなんだよ、と彼は言い添えた。ジヨゼフは彼を火のような視線で焼き尽した。——美しい？ と吐き出すように言った。だってまるで裸じゃないか！」⁽¹⁶⁾。

この、主人公が抱く、人間の身体、とりわけ「裸体」に対する極度の嫌悪感、あるいは羞恥心は、実は、作者グ

リーン自身の幼児期の体験に深く根ざしているのである。彼が、六十三歳のときに発表した最初の自伝『夜明け前の出発』(*Partir avant le jour*, 1963)によれば、幼児の頃、夜、彼が一人で寝るとき、寝室のドアと家族がいる居間のドアは常に開け放たれていたという。そして、姉のメアリーがときどき幼い弟の様子を見に来るのだった。ある夜、それは作者が五歳頃のことだったが、眠っているグリーン少年の枕元に立ったメアリーは、いきなり彼の掛け布団を引き剥がすや大声をあげて母親を呼んだ。燭台を手に駆けつけた母親が眼にしたものは、局部に手を置いて微笑んでいる我が子の姿であった。燭台を置いた彼女は台所に行き、長いパン切り包丁を持って戻って来ると、夢うつつの状態にある息子に向かって、包丁を振りながらこう叫んだ。「切り落としてしまいますよ！」(I'll cut it off)。五歳の子供は、自分の周りで起きている事が理解できず、ただ母親の激しい怒りを前にして泣き出すことしかできなかった。姉のメアリーは何事かを眩きながらも泣いている弟にまた布団を掛けてやり、優しくキスをした。蠟燭の火が吹き消されると、家族の者たちは部屋を出、幼子は再び眠りについた。⁽¹⁷⁾作者自身が、「自分のなかに深い痕跡を残したと考へざるをえない」と語るこのエピソードを通して解ることは、敬虔なプロテスタントで、毎夜、子供たちに聖書を読み聞かせたという母親の、身体、とりわけ性に直接結びつく部位に対する極度の嫌悪感である。五歳の子供が意識的に自慰行為をしていたとは考えられないが、母親のなかには、このとき既に、そうした〈悪習〉に将来染まるかもしれない我が子に対する絶望感があったと思われる。彼女の、こうした身体に対する嫌悪を裏付けるエピソードは自伝中に度々語られている。同じ自伝のもう少し先では、入浴中の幼い息子の身体を彼女が洗ってやる場面が出てくるのだが、すっかり洗い終わると彼女は浴槽から離れて、不満げな様子で息子の身体を見つめたという。また、首、耳、耳の後ろと洗ってきて、「さあ、今度はからだ」と言って身体を洗うのだが、そのとき母親が使った「からだ」(the

body) という言葉は、幼いグリーンに非常に気詰まりな感じを与え、彼は、「その言葉がまるで恥ずべきことを意味しているかのように感じられ、十五、六歳になるまで使うのがためらわれたほどだった」という。⁽¹⁹⁾さらには、生ぬるい湯船に浸かっている息子から少し離れたところに立って、手を乾かしていた母親が、突然視線を落として息子の局部に眼をやり、誰かが独り言を呟くように「ああ、なんて醜いんだろう！」と言い、身震いするように顔をそむけた。息子はなぜとも知らず顔が赤くなるのを感じた。わけの解らない衝撃が彼の内部に走った。母親は、罰することのできない罪人でも見るように、悲しげに息子を眺めた。そして、服を着た息子を彼女は強く抱き締めた。⁽²⁰⁾こうした母親の、身体(とりわけ裸体)に対する異常なまでの嫌悪感(グリーンはそれを本能的恐怖と呼んでいる)は、ジュリアン少年の、ひいては作家グリーンの意識に大きな影響を与えたのは疑いえない。

実際、「身体」という言葉は、ルイ・アンリ・パリアが指摘するように、作家の意識のなかで次第に「崇高さと醜悪さ」という両義的な響きをもつようになってゆく。⁽²¹⁾『モイラ』以外にひとつだけ例を挙げれば、『幻を追う人』(1934)のなかで主人公マニユエルは、恋するマリイ・テレーズの「身体」について次のように語る。「いつもの席に腰掛け、両手に僕の本を抱えたまま、僕は少女がすることもなく、時間をも自分をも、——母親がああ《馬鹿大きい身体》と呼んだものを持って余して、僕の前を往ったり来たりするのを眺めていた。不思議なことに、このブラス夫人の形容は僕の心を動かした。夫人が苛々して来る度にこの呼名を娘に用いるのを聞くと、僕は頬が赤くなつた。いつも夫人がそれを使わないことを望んでいながら、聞けば心が浮立って、漠然と悪事をしたような気がした。事実こうした言葉を耳にすると、マリイ・テレーズが着物を脱がされ、問題の身体が突然僕の眼の前に現れたような気がしたのだ」(傍点坂口)。⁽²²⁾

傍点部分に注目しよう。ここで重要なのは、主人公の想像力の引金になっているのが、少女の母親が娘に対してもちいる「馬鹿大きい身体」(son grand corps bête) という言葉であるという点である。この言葉が主人公の心のかの欲望にひとたび火をつけると、それは次第にエスカレートし、最後は少女の「裸体」を夢想するまでに至るのである。

もちろん、自伝のなかで問題になっているのは、母親が口にした作者自身の「身体」についての気詰まりや恥ずかしさであり、上記引用の「身体」は欲望を起こさせる「異性の身体」であるという違いはあるのだが、いずれにせよ、ここで確認しておきたいのは、本来ニュートラルで善でも悪でもないもの(あるいはそのどちらにもなりうるもの)としての「身体」を明確に意識する以前の幼年期に、グリーンは母親の言葉や振舞いを通して、人間の「身体」とは何かよからぬ醜悪なものなのだ、という観念を知らず知らずのうちに植え付けられたということなのである。

二、罪としての性欲

こうした、「身体」を恥ずべきものと見なす主人公(そして作者自身)の感覚は、小説中ではさらに過激になって、「身体」を「敵」と考えるまでになる。註(14)の引用文の直後には、「むかし、彼の父親は、肉体は地獄に通じ魂は天国に通じると、よく聞かせてくれたものだ。その通りだ、肉体はキリスト教徒の敵なのだ」(傍点坂口) ²³ と言う表現が続く。この文章は語り手による叙述だが、前半と後半ではかなり異質な響きを持っている。前半の文は、語り手が客観的に主人公ジョゼフの過去の体験を語っているのだが、後半の文は、語り手と主人公の語りが判別しがたく混じ

り合っている。フランス語原文の時制である半過去形を訳者が現在形で訳しているのには意味がある。引用のこの二文には前半と後半で大きな亀裂が存在する。実は、後半の一文は自由間接話法 (discours indirect libre) で書かれているのである。自由間接話法とは、間接話法と同様の人称、法、時制を持ちながら、間接話法の目印となる導入動詞と接続詞が省かれる話法である。十八世紀から二十世紀にいたる欧米の物語作品において、作中人物の内面心理がテクスト中にどのような方法で叙述されるかを詳細に分析した『透明な内面』の著者ドリット・コーン⁽²⁴⁾は、この話法を「叙述的モノログ」(monologue narrative)と名付け、その特質を次のように指摘する。「これはまさに三人称で書かれたフィクションとしてのテクストのなかで、作中人物の内面の言説が語り手の言説となることで、言説の変換がなされるのである」⁽²⁵⁾。

要するにこの話法の特徴とは、作中人物が自らの言葉や考えを語り手に委ねることにあり、両者の言葉が分かちがたく融け合う点にある。ここで語っているのは、たしかに語り手であるが、その語りの声にはジョゼフの声も重なっており、さらに、こう言つてよければ、作者グリーン自身の声までもが一番奥で響いているはずだ。というのも、先に引用した自伝『夜明け前の出発』のなかに、これとまったく同じ言葉が出てくるからである⁽²⁶⁾。

実際、グリーンは『モイラ』構想中、幾度も一人称で書きたい誘惑に襲われ、現実には、草稿段階では一人称で書いていたのである⁽²⁷⁾。このように、作者が主人公にきわめて近いところに立っているという点において、『モイラ』はこれまででのグリーンの小説作品とは、はっきり趣を異にしている作品なのである。

さて、このような、本来ニュートラルであるはずの「身体」を「敵」とまで見なす感覚はいったい何に由来するのだろうか？ それは、身体が性的身体として機能することへの嫌悪感、もっと言えば、それを罪として感じる意識が

主人公のなかに強くあるからなのだ。敬虔なプロテスタントとしてのジョゼフにとって、人間の身体とは、何よりもまず性的欲望が支配するおぞましい場所として意識されているのである。親友デーヴィドとのやりとり。

「…僕等の年では、本能は殆ど抵抗できないものだ、……セックスの本能はね。——僕・は・セ・ッ・ク・ス・の・本・能・を・憎・む・とジョゼフは鈍い声で言った。彼は拳を握りしめ、顔の上半分をランプの灯に照されて、机のそばに立っていた。(…) 無理に抑えた激しさで、彼は言い続けた。——僕が今言ったのを聞いたね？ 僕はセックスの本能を憎むんだ。僕たちがそれに負けるっていうのかい、僕たちが？ こういう盲目的な力というものは、悪だよ。——必ずしもそうじゃない。——いや、常にそうだ。僕たちは錯乱の危機に於て孕まれるんだ。ことがどんな具合に行われるか、僕が知らないとも思うのかい？ ぞっとするようなことだよ」。(28) (傍点坂口)

次の引用は、学生仲間の一人キリグルーとの会話。

「…ややあつて、キリグルーはまた口を開いた。——君には君の身体が敵としか映らない。頭の中で、身体は悪魔から来たものだと思っている。君の眼からすれば、肉体はすべて詛われたものなんでしょうね？ (…)

——今是一九二〇年なんですよ、ジョー。(…) 君は目を覚まして、君自身から抜け出し、君のまわりで言われていることに耳を傾けなければね……。ジョゼフはじっと相手を見た。——僕は何度も耳を傾けましたよ、と彼は言った。勿論いやいやながらですけどね」。(29)

これらの引用箇所から解るのは、ジョゼフにあっては、何よりもまず、人間の「セックスの本能」が人間を錯乱に追い込むものとして「悪」と規定されていること。そして、その本能が働く場としての身体も当然のことながら「悪」であり「敵」だということである。こうしたジョゼフの「性欲の機能する場としての身体」に対する憎悪は、彼が人生の抛り所としている聖書の思想を背景として強化されていることは明らかだ。たとえば、引用文(28)の少し前には、「淫行の者は決して神の国を嗣ぐことがないのを僕は知っている、聖書にはつきりそう書いてあるんだから」という言葉があるが、これは新約聖書「コリントの信徒への手紙第六章九―十節」を根拠とした発言である。⁽³¹⁾ さらに興味深いことは、「セックスの本能を憎む」という主人公の発言とまったく同じ言葉が、作者自身の日記の中にも見出されることである。『モイラ』執筆中の一九四九年二月二六日の日記。「長い年月にわたる闘いと考察のすえに私が辿り着いた真実、それは、私はセックスの本能を憎むということだ」⁽³²⁾ (傍点坂口)。これに類する表現は日記中に度々見えており、グリーンが、人間の本質とも言える性本能を、その重要性を認めつつも強く嫌悪していたことがうかがえる。そしてそれは、『モイラ』のなかでジョゼフの口を借りて言わせるほどにまで根深いものであったのだ。

ところで、こうした「性欲の機能する場としての身体」に対する否定的感情は、キリスト教に伝統的にあるものなのだろうか？ ウタ・ランケーハイネマンは、その著書『カトリック教会と性の歴史』のなかでキリスト教に根強い性ペシミズムと聖職者の独身制度の欺瞞を鋭く指摘した。⁽³³⁾ 彼女によれば、カトリック教会はその長い歴史のなかで、結婚や肉體、性的快楽を敵視することによって、本来のキリスト教の姿を歪めてしまったと言う。彼女は、キリスト教の性ペシミズムは、旧約聖書のユダヤ教にその起源はなく、原始キリスト教最大の異端とされたグノーシス派の影響によるものと言う。⁽³⁴⁾ また、宗教哲学者の八木誠一氏は、マリアの処女懐胎の伝説の意味に触れながら、それがイ

エスの神性を表すものではなく、「男女の性の交わり自身も、その結果生まれる子も、汚れているという感覚——それは正統的ユダヤ教ではなく、むしろ肉體性を汚れと見做した一部のヘレニズム宗教性の産物であろう——を前提として(35)」と指摘している。

ヘレニズム時代の非キリスト教的宗教運動であるグノーシス主義の、多様で複雑な有り様を体系的に整理した、ハンス・ヨナスの大著『グノーシスの宗教』(36)によれば、この宗教運動はまったく独自の宇宙論、人間論、終末論をもっている。ここでそれらを詳述する余裕はないが、ごく簡単にまとめれば、人間は元々神性を宿した存在であったが、この地上という闇の世界に転落してしまった。そこでは人間の内奥にある神的靈性(プネウマ)は肉體の中に閉じ込められてしまっている。プネウマは天上の神性が支配する光の世界に郷愁を感じ、自らを閉じ込めている肉體という牢獄を脱し、なんとか天上界に帰還したいと望むが、肉體を支配している官能の快樂に呪縛され果せない。そこで、人は、神的世界から遣わされた救世主の助けを借りて、快樂の罠に気づき、愛欲の迷妄を脱して天上界への帰還を果す。(37)こうしたグノーシス主義的な宗教観は、実は、『モイラ』の中でも随所に現れるのである。英文学の講義で読んだ、シエークスピア『ロミオとジュリエット』第二幕第一場の最終場面でのマキューシオの台詞の意味が、ジョゼフにはどうしても解らない。それが非常に暗示的に女性の性器を賛美しているのだと教えられたジョゼフは、憤慨のあまりシエークスピアのテキストを真つ二つに引き裂き、床に叩き付けてしまう。(38)その行為の愚を静かに論ずデーヴィドとの会話。

「——シエークスピアは一度は読まなければならない、だから僕が、そのうち君に削除版をあげることにしよう。

勿論、その本を破いたってことは君のために賛成しないね。もつとも……。ねえ、ジョゼフ、この世は汚らわしいものだよ、そのことはどうしても諦めなければならないんだ。——そんなことはない、とジョゼフはすつくと立って言った。この世の汚らわしさを諦めるなんてことは、まるで福音書を否定することじゃないか。——それは問題が違う、とデーヴィドの方も同じように立ち上がりながら答えた。君がこの世で生きているのは、神が君をそこに置き給うたからだよ。ジョゼフの眼はきらきらと光り出した。——僕は、この世を憎むんだ、分かる？ わが祈るは世のためならずとキリストは言い給うた。この世は神に見棄てられているんだ」(傍点坂口)。

ここでも二人の会話はどうしても囁み合わない。「この世の汚らわしさ」を諦めるデーヴィドとその汚らわしさで満ちた世界を「憎む」ジョゼフ。ジョゼフの憎悪のなかには、自分だけはこの世の汚らわしさから免れている、あるいは少なくとも、その汚らわしさに毒されないよう克己しているという強い自負心が現れているように思われる。こうした「汚れた世界」に直面するときの二人の態度の違いは次第に大きくなり、デーヴィドの存在は、友人のほとんどいないジョゼフにとって非常に貴重なものでありながら、同時に妙に苛々させるものとなる。

「それにしてもなぜ、デーヴィドはいつも彼をいらさせなければならぬのだろう。(原始時代の宗教でなくちゃ、と彼は思った。あの男が望んでいるのは、それはよく飼い馴らされた宗教だ、白い法衣と手入れの行き届いた爪を持った、そういう宗教だ。)(40) (傍点坂口)。

傍点部分が指し示す宗教が、グノーシス派の宗教を指すと断定はできないが、ジョゼフの精神が強く求めているものは、善と悪、光と闇が明確に区分され、その激しい闘争の末に善（光）が勝利を収めるグノーシス主義的な、あるいは二元論的な宗教であることは疑いえないように思われる。そういう彼の立場から見ると、どんなことにも理性的かつ紳士的な態度で接するデーヴィドの信じているキリスト教は、生ぬるい事なかれ主義の宗教のように見えてしまふのだ。

以上から、作者の分身とも言える主人公ジョゼフの中には、身体、とりわけ「性欲の機能する場としての身体」にたいする憎悪があり、そうした憎悪は、正統キリスト教に本質的に内在するものではなく、グノーシス主義に代表される、非キリスト教的な原始宗教に特有の世界観、人間観と通低していることが理解できたと思う。

さて、こうした身体嫌悪のいっぽうで、それと矛盾するのだが、実は、ジョゼフという青年は、女の身体に強烈に惹き付けられてしまう側面も有しているのである。彼の心の奥底では、この矛盾する観念が、常に激しく闘ぎ合っている。そして、この魅惑される彼の内面で渦巻く、一種暴力的とも言える強力なエネルギーが彼を思わぬところまで引きずって行ってしまうのだ。したがって次章では、この主人公の内部で荒れ狂う欲望の姿を追ひ、さらにそうした「獣じみた本能」⁽⁴⁾を抱え込んだ主人公の苦悩を跡づけ、彼自身の悪の自覚を明らかにしたいと思う。

三、身体の誘惑と苦悩

小説第二部の最初で、ジョゼフはミセス・デアの下宿を引き払い、デーヴィドがいるもつと静かで環境のよい下宿

に移るのだが、その直前に彼女から、間もなくモイラが、通っていた、よその町の学校を放校になって帰ってくることに、そして、再びジョゼフがいた部屋を使うことになる旨を告げられる。以前、部屋掃除に来たミセス・デアの黒人の用人ジェマイマから、モイラの美しさを聞いていたジョゼフの心は、この情報に少なからず動揺する。彼は、ジェマイマから聞かされていた、モイラがいたときの寝台の位置を思い出し、突然、それを動かしてみた衝動に駆られてしまう。

「主の祈りを称えている最中に、ふと寝台の位置を変えてみようという奇妙な考えが浮かんた。それはもうどうにもならなかった。自分で自分の言っていることが分からなくなるほど、その考えは彼の心を占領してしまった。(…)一瞬後に、彼は立ち上がり、寝台がはすかいに置けるように、部屋の中央まで、ちょうど暖炉とドアから等距離のところまで、それを引張り出した。(…)寝台を一まわりして、彼はそつと指の先で、枕の上とそれから敷布の上とを、おずおずとした、と同時に愛撫するような手つきで触ってみた。急に、彼はこの狭い臥床ふしどの上に身を投げ出した。寝台のばねが身体の重みに軋り、彼は身体をせいっぱいに伸ばした⁽⁴⁾」。

普段のジョゼフからは想像もつかない行動である。モイラが使っていた寝台に自分も寝ていたのだという思いが、このときジョゼフの心を占領し、それがために自分のお祈りさえ上の空になってしまふのである。そして、以前、モイラが使っていた通りの位置に寝台を動かすという行為は、モイラと一体化したいというジョゼフの無意識の願望を象徴的に表しているだろう。ここでは、言わば、寝台がモイラの「身体の象徴」として作用しているのだ。この場面

では、ジョゼフの内奥に激しく渦巻く欲望が、彼に奇妙な行動をとらせたと言えるだろう。この出来事を契機として、彼は、自分のなかにも抑えきれない欲望のマグマが煮えたぎっていることを意識し、それに苦しめられることになる。そうした主人公の内的葛藤の苦しみの声を二、三引いてみよう。彼はデーヴィドに語る。

「――僕はもう駄目だ。今晚、ついさっき、僕にはそれが確実にわかった。僕の中に悪なるもの、純粹でないものがあるなどと、君だつて思つたりはしないだろう。僕自身も知らなかったんだ。(…)それは突然僕の前に現れた。まるで啓示のようにね、で僕は怖くなった。(…)今晚僕のことなんて、まるでもう神に見棄てられた者の仕業だ⁽⁴³⁾」。

「今迄に嘗て一度も女のことなんか考えたことはなかったのだ。たとえたまたま心を掠めることがあつても、大したことはなかったし、彼を瀆^{けが}すこともなかった。しかしその晩は、昨晚と同じように、何か彼の血を燃え立たせていた。(お綺麗な方ですわ、モイラお嬢様は……)年とつた女中の眩いた月並な言葉が、異様な魅力を持たえて、彼の脳裏に浮かび上がった。心にもなく、彼はモイラの姿を思い描こうとした。彼女の肌はわけても美しく、琥珀色に輝いているに違いない、それから明るい眼、そして彼女の胸、常に隠されている肉体のこの部分、その胸に見られる限りのもの……」⁽⁴⁴⁾。

1章で引用した『幻を追う人』の一節同様に、ここでは、老女中のモイラに関する言葉が、主人公の想像力を刺激し、彼はモイラの美しい身体を思い描く。しかし、そうした想像が、ジョゼフの周囲の学生たちと根本的に異なるの

は、彼は、そういう想像をしてしまう自分を罪深いと考え、深く苦悩する点である。デーヴィドに対してジョゼフは自己の内奥で燃え盛る欲望の炎と、それに焼き尽くされる己の苦悩を語る。

「君は神を見出したし、その神は決して君から離れやしない、が、僕は、いつだって神を失いはしないかとびくびくしている、それは僕が、罪の池の中に眼のところまで沈んでいるような気がするからだ。僕の身体は燃えているんだ(…)。もし僕が女と罪を犯さないとしたら、それは神が僕を守って下さるからだ(…)。だが、僕は自分の犯してもいないこの罪を、恐ろしいほど望んでいるのだ。こうした肉体の飢えがどんなものか、君にはとても分からないよ。僕は時々、僕というものが肉体から引き裂かれているような気がする、まるで僕の中に二人の人間がいて、一人が苦しむのをもう一人がじっと見ているような具合なのだ」(傍点坂口)⁽⁴⁵⁾。

ジョゼフが自分の欲望を「罪」と感じていることに注意しよう。こうした意識はキリスト教徒でない者には理解しづらくところかもしれないが、日々聖書を読み、そのなかのイエスの言葉を人生の指針としている主人公には、こうした欲望に衝き動かされてしまう自分がまるで「罪の池の中に」深く沈み込んで、もがいている存在に思われるのだ。とりわけジョゼフのように克己心の強い青年にとっては、そうした罪悪感、自己分裂を意識させるほどに根強いものとなる。

もちろん、こうした主人公の意識は、愛情の発露としての性と暴力としての性欲とを混同するという誤りを犯しているのだが、グリーンの主人公の多くは、こうした「暴力としての性欲」にのめり込んでしまう人々なのである。⁽⁴⁶⁾『モイラ』においても最後のモイラ殺害に至る伏線として、第一部前半では、ジョゼフはプレーローと殴り合いの喧嘩を

するが、その際、プレーローは「君の心の中には人殺しがいるんだ⁽⁴⁷⁾」と予言的な言葉を発する。また、第一部第十五章では、学生仲間の一人マック・アリストアが、ジョゼフの部屋を訪ね、彼をからかい、わざと怒らせるような卑猥な態度を取る。かっとなったジョゼフは自分の締めている革のベルトを解くと、それを鞭代わりにしてマックの背をしたたか打ちつける⁽⁴⁸⁾。さらに、初めてモイラと出会って、彼女にからかわれたジョゼフは心の動揺を抑えきれずに、彼女のことを考え続ける。

「まったく、彼の記憶の中には、いくら打ち消しても、モイラと出会った時の有様がまざまざと浮かび上がって来るのだ。あの横柄で、高慢ちきな、ちっぽけな女、それがモイラだった……。 (…) ジャケットを拾おうとして、その前に背中を折り曲げた自分の姿を、彼はまざまざと思い浮かべた。ああ、なんと悦びだろう、もしあのざらざらした毛糸であの女の唇を拭^{ぬぐ}ってやったら。何という恐ろしい程の悦びだろう、あの女をその傲慢さの故に殴りとばし、罰したなら、そう、思いきり罰してやったなら。血がかつと頭にのぼって来た⁽⁴⁹⁾」。

こうした暴力的に噴出する欲望のエネルギーに主人公は振り回されてしまうのだが、その際、彼が感じるのは、上記最後の引用箇所からも読み取れるように、目くるめくほどの快感なのである。モイラの混血児としての独特な美しさに魅了され、それを暴力的に犯したいと感じてしまうジョゼフは、女というものに、愛を、キリスト教的な意味での愛を感じられないのであり、そのことに陶酔的な悦びを覚えながら同時に、そうした自分が神から見放された存在であると感じ絶望的になるのだ。彼は、新約聖書が語る愛を理解するし、イエスが語る無償の隣人愛を尊いと感

ことのできる男なのだ。だが、その彼が、こと女に対してはどうしてもその「愛」を實踐することができず、そこに邪悪な感情が忍び込んでしまうのだ。彼は自問する「なぜ人々の愛の中に、罪がひそんでいなければならないのだからか？」⁽⁵⁰⁾。それは、彼が女の「美しさ」に魅了されるからである。そんなことは誰にだってある、ごく普通のことのように思われるが、ジョゼフの場合、そうした女の美しさが彼の内部深くに巣食う暴力的な欲望に火をつけてしまうのだ。その瞬間に福音書的な隣人愛は一瞬にして消え、激しい欲望が、相手を殺さずにはおかないほどの暴力的な欲望が始動してしまふのである。そのとき主人公の心では、陶酔的な快楽と絶望的な罪悪感とが激しい闘争を繰り広げる。まさにマニ教的な善と悪、光と闇、霊と肉とが熾烈な闘いを繰り広げるのである。そして、不幸なことに強烈な快楽がすべてを覆い尽くしてしまう。

こうした暴力的欲望にとまなう快楽に屈服してしまう主人公の精神の軌跡は、これまた作者グリーン自身のそれでもあるのだ。ただ、グリーンの場合、欲望を惹き起こす対象は美しい女ではなく男なのである。同性愛であるグリーンにとつて、美しい青年の顔と身体は死にたいほどの欲望と快楽を彼にもたらす。しかし、それは同時に恐ろしい魂の荒廃を彼にもたらさずにはおかない。実は、『モイラ』の中にも同性愛のテーマは散見されるのだが、本稿ではこれには深入りしない。この作品で、自己の存在の隠された根に触れたグリーンは、以後、自伝、日記、そして小説や戯曲のなかで、自己の、いわば、肉体に刺さった棘とも言えるこのテーマにひるむことなく切り込んでゆくだろう。ここでは、そうした作者の内面の苦悩を語る自伝の一節を引用するにとどめよう。グリーン六十六歳のときに発表された自伝第三作『遙かなる土地』(Terre lointaine, 1966)の一節である。作者は自身の若きアメリカ留学時代に、実際に自分の身に起こった遠い記憶を回想する。田舎の小駅で出会った若い馬車の御者についての回想。

「私の心を苦しめるのは、その若者が美しいということだ。そのことを意識せずにはいられない。外で日焼けしたばら色の頬、はだけたワイシャツから見える首筋、腋までむき出しの腕を見てしまう。自分にもわからない理由から、気詰まりを感じる。眼を路上に伏せようとするのだが、思わず見たくないものを見てしまうのだ。突然、予想もしていなかったことが起こる。彼はうとうとしはじめたのだ。すると私は、まるで誰かに頭をつかまれ、無理矢理それをまわされでもしたように、隣の若者を見てしまい、臍を締めつけられるような思いを味わう。なぜ人は、ただある人間の顔を見ただけでこんなに苦しまなければならないのか？ 何度も見、何度も苦しんでかまわないが、しかし、その苦しみのなかには、心を荒廃させる残酷な幸福があるのだ。何を考えているかわからないまま、私は死ねれば死んでしまいたかった」(傍点坂口)。

傍点部分に注目したい。眠っている美しい若者の顔と身体を盗み見る作者の心を支配しているのは、強烈な幸福感であるが、それは「残酷な」ものであり、「心を荒廃させ」ずにはおかないものなのだ。そして、この箇所は註(50)で引用した『モイラ』の一節とも明らかに呼応する。グリーンのようなある種の人々にとっては、女にしろ男にしろ、美しい他者に魅了されるとき、そうやって、理性の制御ではどうにもならないほどに、惹きつけられて行ってしまう心の動きのなかには、おそらく常に「幸福と荒廃」が共存しているに違いないのだ。そしてその幸福感が大きければ大きいほど、心の荒廃も深いのだろう。それはなぜかと言えば、その幸福感が肉の快楽に根ざしているからである。

四、パウロと親鸞における罪と悪

ところで、引用した自伝の一節に見られる作者の心の動きは、パウロが語る自分自身の心の有り様と驚くほど似ていることに気づく。「ローマの信徒への手紙」第七章の一節。

「……しかし、わたしは肉のひとであり、罪に売り渡されています。わたしは、自分のしていることがわかりません。自分の望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです」⁽⁵²⁾。

ここで、パウロは、人間の罪と律法の関係について語っているのだが、同じ章の少し前では、「わたしたちが肉に従って生きている間は、罪へ誘う欲情が律法によって五体の中に働き、死に至る実を結んでいました」⁽⁵³⁾と語っている。ここで興味深いのは、律法という、神から与えられた宗教的、倫理的掟に従って生きようとしていたときには、罪へ誘う欲情が身体の間で働いていた、という点である。さらにもうひとつ注目すべきは、そうやって掟に忠実に生きようとしているパウロは、同時に「肉に従って生きて」いたということである。肉に従って生きる、というときの「肉」とは（先の引用文中の「肉のひと」も同様）人間の生身の身体も指しているようだが、むしろ第一義には、人間の「自我」を指していると思われる。今ここで、八木誠一氏にならって自我を「自然ではない人為、言葉を用いて考えるもの、⁽⁵⁴⁾考えて行動を扒び取る当体であり、そうでありながら、他方では感覚の当体である」と規定し、その「言葉を用いる

自我の公共性を理性とよぶ⁽⁵⁵⁾ことにすれば、パウロがここで語っている「肉のひと」である我とは、「理性としての自我」と言い換えることができるだろう。こう考えれば、ここでのパウロの言葉は、そうした理性的な自我が律法に従って生きようとしたとき、罪が五体の中に芽生えたと理解することができるだろう。パウロによれば、人は「肉のひと」として「理性としての自我」によって生きる限り、罪から逃れることができない。「もし、わたしが望まないことをしているとするれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまわっているという法則に気づきます⁽⁵⁶⁾」。善をなそうと「理性としての自我」はたゆまぬ努力を続けるが、その努力には常に悪がまわりついてしまうのだ。

こうして見てくると、「ローマの信徒への手紙」第七章は、人間が「理性としての自我」として生きることの限界、あるいはその破綻を語っていることは明らかであろう。では、どうするか？ 次章でパウロが述べているように、人は自己の内なるキリストの働きに気づき、その促しによって生きること、理性としての自我の限界を克服するしかないのである。

「従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死の法則からあなたを解放したからです⁽⁵⁷⁾」。

ところで、こうしたパウロの人間観は、絶対他力の信仰に生きる親鸞の人間観と驚くほどの類似を見せるのだ。弟子唯円が師親鸞の教説を聞ききした書『歎異抄』によれば、

「善人ナヲモテ往生ヲトグ、イハンヤ悪人ヲヤ。シカルヲ、世ノヒトツネニイハク、悪人ナヲ往生ス、イカニイハンヤ善人ヲヤ。コノ條、一旦ソノイハレアルニニタレドモ、本願他力ノ意趣ニソムケリ。ソノユヘハ、自力作じりきさ善ノヒトハ、ヒトヘニ他力ヲタノムココロカケタルアヒダ、弥陀ノ本願ニアラズ」⁽⁵⁸⁾（傍点坂口）。

親鸞思想の要と言われる、いわゆる「悪人正機」説の根拠となる有名な一節であるが、特に傍点部分に注目したい。石田瑞麿氏の訳によれば「みずからの能力をたよりに善行を積むひとは、ひたすら阿弥陀仏のお力にまかせ切る気持が欠けているために、阿弥陀仏の本願の対象とはならない」ということになる。

「みずからの能力をたよりに善行を積むひと」とは、先に見たパウロの思想に照らして考えれば、「理性としての自我」によって、それを頼りに生きようとする人のことである。社会通念として考えれば、こうした人間のあり方が否定されるのは理解しがたいことかもしれない。しかし、親鸞は、この世に生きる人間の実存を深く見据えていた。九歳で出家、叡山に上り優れた仏教者になろうと努力を重ねた若き親鸞を悩ましたのは、どんなに抑えても抑えきれずに自己の内部から噴出する性欲であった。どれほど經典を勉強し、仏教教義の知識を深めても解決できない自身の性欲の苦惱。やがて彼は叡山を下り、法然の門に入り、専徒念仏の教えに自己の救いを見出してゆく。こうした、自己の体験に根ざした親鸞の人間認識の根本にあるのは、克己、修行をいくら積み重ねても、いかにしても解決できないあるものが、人間の内奥深く巣食っているという認識であった。彼はそれを「煩惱」と呼ぶ。それはたんに人間の内部にある欲望といったものではなく、もっと本源的に人間に備わっているもので、「久遠劫ヨリイママデ流転セル苦惱ノ

旧里ハステガタク」(無始永遠の昔から今日まで、生まれかわり死にかわり流転してきた苦悩の世は、なつかしい古里としてあるばかりに、なかなか捨てることがむずかしく)、永遠についてまわる苦しみだと語る。こうした人間認識をもつ親鸞が見据えている人間の「悪」とは、したがって、たんに倫理的、道徳的悪ではなく、伊藤益氏が指摘するように、それは人間に本質的に備わった「存在論的悪」⁽⁶⁰⁾なのである。こうした「悪」を内部に抱え込んだ人間は「ワガハカライニテ」(自分の才覚をたのみとして)⁽⁶¹⁾善をなすことなど不可能なのである。では、どうするか? 人は「存在論的」悪を抱え込んだ自己自身の「悪性」を腹の底から自覚し、一切のはからいを捨て、阿弥陀仏の本願に身を投げ委ねるしかないのだ。そうすることで初めて「煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり」という境地が開けて来るだろう。そして、それは、八木誠一氏も言うように「人間が罪人であるままで、キリストを宿す存在だ」⁽⁶³⁾というパウロの人間認識と一直線につながってゆく。

結 語

以上、ジュリアン・グリーンの『モイラ』を中心に、自伝や日記なども参照しながら、ジョゼフ(IIグリーン)の悪の自覚と、パウロ、親鸞の人間認識とがどう切り結ぶかを見てきた。小説では、ジョゼフは、モイラと交わった後に彼女を殺害し、林のなかに死体を埋める。折しも降り出した雪はやむことなく翌朝まで降り続き、犯罪の痕跡は降り積もった雪に覆い隠される。翌日、ジョゼフは夢遊病者のようになって大学町をひとりさまよう。彼を逃亡させようとするブレーローの援助の申し出を断り、デーヴィドにのみ、犯した罪を告白し、彼は自主することを決意する。

今、改めて、この作品の全体を振り返り、ジョゼフという真面目でナイーヴなひとりの青年の大学入学から最後の犯行までを眺め渡してみると、彼の行動のすべてが「理性としての自我」によって強力に推進されていたことが見て取れるし、日々の活動のすべてが、まさに「自力作善」の積み重ねであったと見えるのだ。そして、悲しいかな、そうしたストイックなまでの克己の努力は、最終的に彼を破滅へと導いてしまった。第二部二十一章、自分を誘惑に来たモイラを前にしたジョゼフの心情を語り手が代弁する。「もし彼が彼女を欲したとしても、それは彼の罪ではなかった。彼の男の身体が彼女を欲したのだ。しかし、身体は、もし人がそれに負ければ、地獄へと通じているのだ。彼の身体が欲したものを、彼の魂は欲しなかった」⁽⁶⁴⁾。ここここに至っても、ジョゼフの魂と肉体は完全に分裂したままである。そして、パウロの言葉どおり、身体の誘惑に負け、望まぬ悪を行った彼は地獄へ落ちることになる。

ところで、新約聖書においては、身体は淫行のためでなく、「神・キリスト・聖霊の働きの座」⁽⁶⁵⁾として重要視されている。そして、グリーン自身、身体を敵と見なしながら同時に、それが「魂の眼に見える要塞であり、とりわけ、聖霊のいます神殿である」⁽⁶⁶⁾と語っているのである。こうした認識をもちながら、作者は、自己の分身とも言えるジョゼフが罪を犯すのを妨げようとはしなかった。作者は、ジョゼフという人物を、「自力作善」の克己心の強い若者として造形したが、そうした人間のあり方の限界をも十分に意識していたものと思われる。だからこそ、ともすれば信仰ゆえの傲慢さを隠さないジョゼフに、あえて罪を犯させたのであろう。その背景には、自伝中に語られるグリーン自身の深い自己認識があったのである。「私が人間性を見出したのは罪を通してであった」⁽⁶⁷⁾。

罪を犯したジョゼフが、自己の内部に本質的に存在する「悪性」を自覚し、そうした自覚するわれをも含めた「理性としての自我」、親鸞的に言えば、「はからいのわれ」を全面的に放棄するとき、彼の前には、おそらく新たな地平

悪の自覚としての文学

が開かれて来るのであろう。

註

本稿中に引用したジュリアン・グリーンの作品は、ブレイヤード版全集八巻を用いた。

Julien Green, *Œuvres complètes*, tom. 1-8, Éditions Gallimard, 1972-1998. (O.C.と略記)

日本語訳については、ジュリアン・グリーン全集十四巻、人文書院（一九七九～一九八三）、各巻の訳者の訳文を使用した。論旨の都合上一部改変した（全集と略記）。なお、人文書院版全集未収録の著作（小説の一部、自伝、日記の大部分）については筆者が訳出した。

- (1) たんに時間的な意味で、作家の人生の半ばに位置するというだけでなく、作品のテーマや文体の観点から見ても、作家活動の前半と後半とを分ける分岐的な作品となっている。O.C. tom. I. *Introduction*, p. XXVII 参照。
- (2) Julien Green *Journal*, 22 octobre 1931. O.C. tom. IV, p. 130. 『日記』一九三二年十月二十二日（全集第七巻 p. 85）
- (3) O.C. tom. I. *Introduction*, p. XXXVIII.
- (4) 「ローマの信徒への手紙」七／十九、『新約聖書』新共同訳、日本聖書協会、一九九六年、p. 142.
- (5) 唯円著、『歎異抄』、石田瑞麿編訳『親鸞全集』別巻所収（全四巻）春秋社、一九八七年、p. 6.
- (6) 例えば『モイラ』執筆中の一九四九年六月二十六日の『日記』の一節。「数日の中断のあと、私の小説を再開する。思うに、この本のなかで私を前に押し出す力は、ジョゼフの内心のドラマが、必要な置換を施されて、同様に私自身のドラマになつてゐるところから生じてゐる」(O.C. tom. IV, p. 1081.)。
- (7) Julien Green, *Moïra*, O.C. tom. III, p. 3. 『モイラ』(全集第四巻 p. 9.)
- (8) *Ibid.*, p. 29. (全集第四巻 p. 41.)
- (9) *Ibid.*, p. 136. (全集第四巻 p. 183.)
- (10) ミセス・デアの下宿にいる他の学生たちの俗悪さに堪えきれなくなったジョゼフは、真面目で温厚な友人デーヴィドの勸

めで、彼の下宿に移る。そこで初めて心の平安を得られたジョゼフだったが、前の下宿先の自分の部屋に外套を置き忘れていたことに気づき、ある日外套を取りに戻る。そこで彼は初めてモイラと対面する。(O.C. tom. III, pp. 120-123. 全集第四卷 pp. 162-166.)

- (11) *Ibid.*, p. 49. (全集第四卷 p. 65.)
- (12) *Ibid.*, p. 51. (全集第四卷 p. 67.)
- (13) *Ibid.*, p. 51. (全集第四卷 p. 67.)
- (14) *Ibid.*, p. 106. (全集第四卷 p. 143.)
- (15) *Ibid.*, p. 93. (全集第四卷 p. 127.)
- (16) *Ibid.*, pp. 38-39. (全集第四卷 pp. 52-53.)
- (17) Julien Green, *Partir avant le jour*, O.C. tom. V, pp. 656-657.
- (18) *Ibid.*, p. 657.
- (19) *Ibid.*, p. 701.
- (20) *Ibid.*, pp. 701-702.
- (21) Louis-Henri Parias, *Julien Green, corps et âme*, Fayard, 1994, p. 42.
- (22) Julien Green, *Le Visionnaire*, O.C. tom. II, p. 277. 『幻を追う人』(全集第九卷 p. 96) および O.C. tom. V, p. 1600. のジャンク・ブレイによる『夜明け前の出発』の註も参照。
- (23) Julien Green, *Moïra*, O.C. tom. III, p. 106. 『モイラ』(全集第四卷 p. 143.)
- (24) Dorrit Cohn, *La transparence intérieure* (titre original, *Transparent Minds*), traduit de l'anglais par Alain Bony, Édition du Seuil, 1981.
- (25) *Ibid.*, p. 122.
- (26) Julien Green, *Partir avant le jour*, O.C. tom. V, p. 702.
- (27) O.C. tom. III, pp. 1533-1534. 『モイラ』の最終草稿に付された〈序文〉にはこんな一節がある。「『モイラ』は当初一人称で書かれた。実際わたしは、小説全体を、ある殺人者の告白のようなものにしてしようと考えていた。こうして二十ページば

悪の自覚としての文学

悪の自覚としての文学

かり一人称で書きながら、作者は最終的に、この人称を放棄したのだが、その理由は、当初、非常に単純でナイーヴな精神の人物として主人公を造形したのに、一人称で書いているうちに、主人公がほとんど内省的になってしまい、その矛盾があまりに大きくなってしまったため、残念ではあったが三人称に書き改めたと言う。

- (28) Julien Green, *Moïra*, O.C. tom. III, pp. 86-87. 『モイラ』(全集第四卷 p.116.)
- (29) *Ibid.*, p. 134. (全集第四卷 p. 180.)
- (30) *Ibid.*, p. 86. (全集第四卷 p. 115.)
- (31) 「正しくないものが神の国を受け継げないことを、知らないのですか。思い違いをしておいてはいけません。みだらな者、偶像を礼拝する者、姦通する者、男娼、男色をする者、泥棒、強欲な者、酒におぼれる者、人を悪く言う者、人の物を奪う者は、決して神の国を受け継ぐことができません。」「新約聖書」新共同訳、日本聖書協会、一九九六年、p.153.
- (32) Julien Green, *Journal*, O.C. tom. IV, p. 1065.
- (33) ウタ・ランケーハイネマン著、高木昌史他訳『カトリック教会と性の歴史』、三交社、一九九六年
- (34) ウタ・ランケーハイネマン、前掲書、pp. 13-27.
- (35) 八木誠一著「暗かった性——キリスト教の場合——」、『現代思想』〈増頁特集Ⅱ性〉所収、青土社、一九八二年、p. 178.
- (36) ハンス・ヨナス著、秋山さとつ／入江良平訳『グノーシスの宗教』、人文書院、一九八六年
- (37) ハンス・ヨナス前掲書、pp. 53-145.
- (38) Julien Green, *Moïra*, O.C. tom. III, p. 70. 『モイラ』(全集第四卷 pp. 92-93.)
- (39) *Ibid.*, p. 75. (全集第四卷 p. 100.)
- (40) *Ibid.*, p. 77. (全集第四卷 p. 102.)
- (41) *Ibid.*, p. 69. (全集第四卷 p. 91.)
- (42) *Ibid.*, p. 106. (全集第四卷 pp. 143-144.)
- (43) *Ibid.*, p. 108. (全集第四卷 pp. 146-147.)
- (44) *Ibid.*, p. 117. (全集第四卷 p. 158.)
- (45) *Ibid.*, p. 148. (全集第四卷 pp. 199-200.)

- (46) たとえば、『レヴィアタン』(Leviathan, 1929)の主人公ゲレは、自分が好意を寄せたレストランの看板娘アンジェールを、深く愛するようになりながら、彼女の顔に二目と見られないほどの傷を与えてしまう。
- (47) Julien Green, *Moina*, O.C. tom. III, p. 26. 『モイナ』(全集第四卷 p. 37.)
- (48) *Ibid.*, p. 78. (全集第四卷 p. 105.)
- (49) *Ibid.*, p. 125. (全集第四卷 p. 168.)
- (50) *Ibid.*, p. 151. (全集第四卷 p. 203.)
- (51) Julien Green, *Terre lointaine*, O.C. tom. V, p. 1063.
- (52) 「ローマの信徒への手紙」七／十四—十五、『新約聖書』新共同訳、日本聖書協会、一九九六年、p. 142.
- (53) 「ローマの信徒への手紙」七／五、前掲書、p. 141.
- (54) 八木誠一、前掲論文、『現代思想』所収、p. 180.
- (55) 八木誠一、前掲論文、p. 180.
- (56) 「ローマの信徒への手紙」七／二十一—二十一、前掲書、p. 142.
- (57) 「ローマの信徒への手紙」八／一—二、前掲書、p. 142.
- (58) 唯円著、『歎異抄』、石田瑞磨編訳、『親鸞全集』別巻所収(全四卷)春秋社、一九八七年、pp. 89.
- (59) 前掲書、p. 13.
- (60) 伊藤益著、『親鸞——悪の思想——』集英社新書、二〇〇一年、p. 77.
- (61) 唯円著、『歎異抄』、石田瑞磨編訳、『親鸞全集』別巻所収、p. 12.
- (62) 石田瑞磨編訳、『親鸞全集』第一巻、『教行信証』上、春秋社、一九八五年、p. 111.
- (63) 八木誠一著、『パウロ・親鸞*イエス・禅』法蔵館、二〇〇〇年、p. 80.
- (64) Julien Green, *Moina*, O.C. tom. III, p. 170. (全集第四卷 p. 229.)
- (65) 八木誠一前掲論文、『現代思想』所収、p. 179.
- (66) Julien Green, *Partir avant le jour*, O.C. tom. V, p. 702. なお、同じ年のグリーンの言葉は「コリントの信徒への手紙」六／十九「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや

悪の自覚としての文学

悪の自覚としての文学

- (69) 自分自身のものではないのです」に基づく。『新約聖書』新共同訳、日本聖書協会、一九九六年、p. 153。
Ibid., p. 733.